

白金萩

増田悦子さん追討号 11月号



平成28年11月発行

第69号

白金葭定例句会案内

月例句会報（'16／11／18 9名欠 3神無月、沢庵漬け）

飯田孝三

十二月十六日（金）アビスター第5兼題..枯野、炬燵
一月二十（金）〃 兼題..新年一般
二月十七日（金）〃 第四兼題..雪解、梅

兼題句参考句（十二月十六日分 枯野、炬燵）

玉葱の簾に主あるじ待つ水中眼鏡
あぢさゐの藍のきはみに逝きませる
ひもろぎの鳩に餌やる神の留守

いつ來ても枯野にのこる汽笛の尾
つひに吾も枯野のとほき樹となるか
どこまでも阿Qがゆくや大枯野
ひとりがよく喋る枯野のふたり連れ

八田木枯
野見山朱鳥

秋谷菊野

林亮

わが影の吹かれて長き枯野かな

一句二句三句四句五句枯野の句

久保田万太郎

夏目漱石

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

炬燵に穴のこして海を見にゆけり

飛山正子

松尾芭蕉

一筋に光る川あり大枯野

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

高橋富久江

大石雄鬼

炬燵の間鯨のような父がいる

波多野爽波

あでやかな炬燵蒲団につまずきぬ

市川恵子

炬燵寝の猫の魔性の眼を開く

下平しづ子

目覚むれば妻もうたた寝相炬燵

四戸和彦

暖炉つけ炬燵に入り籠りをり

菅野蒔子

ライスセンターへ委託田圃の穂かな

線路沿ひ朝日に透けて枯芒

増田陽一

ままごとの如き仏事も雁の頃

過ぎし日を夢と知るべし栗を焼く

妻の骨埋め秋夜ぐしやつと酔うのだ

登山靴何處に捨てやう神の留守

ヴェランダに漬ける沢庵遠筑波

光成高志

神無月皇帝ダリア花かゝげ

沢庵漬母が塩振り僕が踏む

休耕地のソーラー・パネル冬に入る

光 みち

マスクして白隱慧鶴の絵図に立つ

凧一号吹かるるものに犬の貌

火事出して沢庵漬ける樽残る

「将門」の見得切る舞台神の留守

(日本舞踏)

シユミーズの少女の像や小六月

松村幸一

沢庵といふ金無垢に変身す

鰐口を大きく振つて神の留守

福助の慄懾の頭の夜長かな

凧一号大統領が決まりたる

惜命忌雜木は晴れを尽くしけり

裏川の鯉の色増す神無月

吉羽多美子

コーヒーに砂糖ひとつを秋灯下

迷ひ込む路地の格子戸石蕗明り

沢庵漬厚く切るのは母のくせ

縁側に正座の膝に冬来る

倉田紀子

浅野正美

小春日を歩く庭園山路めく

沢庵漬母の味似て買い求む

楓櫨の実黄色増すこと香りたつ

神無月喪中のハガキ届きけり

校庭をとりまく樹々の片もみじ

武者昭七

昔のことさと笑ひ捨てたる夜長かな

舞ひ出した雪払ひつつ市に立つ（輪島朝市）

秋の陽や蝶軽やかに舞ひ遊ぶ

波の穂に神の気配や神無月（出雲海岸）

早贅を刺して翔び去る影を見つ

磯目健一

夕焼けの奈落に明星現はるる

干し大根皺深まりて山嵐

神無月十字架の尖塔点灯す

義歯の身に沢庵漬の恨めしき

沼の果て日は燃え尽きて入寂す

青木啓泰

木の実落つトタン屋根から神無月

瓢箪のような男がガムを噛む

ついでにて鳥居をくぐる宮参

さじで食う栗の中身は月の色

がまづみが少し酸っぱい十三夜

小山陽也

神無月なれど月一の神詣で

鳥瓜今年はやけに多く生り

行きつけの店の熊手は太くなり

我が庭の花柚子小さく実りけり

これからは落葉燃やしの日々となる

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

墓ひとつ残して冬田広がれり

妻の骨埋め秋夜ぐしゃつと酔うのだ

櫻がけ沢庵つけて子沢山

裏川の鯉の色増す神無月

ままごとの如き仏事も雁の頃

さじで食う栗の中味は月の色

ヴェランダに漬ける沢庵遠筑波

波の穂に神の気配や神無月（出雲海岸）

波の穂に神の気配や神在月（出雲海岸）

沢庵漬厚く切るのは母のくせ

能果てのシテの摺り足秋思かな

多美子

紀子

陽一
昭七

多美子
孝三
陽一
啓泰

迷ひ込む路地の格子や石踏まり
 沢庵漬母が塩振り僕が踏む
 縁側に正座の膝に冬来る
 義歯の身に沢庵漬の恨めしき
 鳥口を大きく振つて神の留守
 小春日に歩く庭園山路めく
 小春日を歩く庭園山路めく
 小さき手の鰐口ゆする七五三
 過ぎし日を夢と知るべし栗を焼く
 惜命忌雜木は晴れを尽くしけり
 玉葱の簾に主待つ水中眼鏡（悦子さん追悼）
 福助の慇懃の頭の夜長かな
 登山靴何處に捨てやう神の留守
 神無月喪中のハガキ届きけり
 神無月十字架の尖塔点灯す
 干し大根皺深まりて山嵐
 あぢさゐの藍のきはみに逝きませる（悦子さん追悼）
 早贅を刺して翔び去る影を見つ
 風一号大統領が決まりたる
 行きつけの店の熊手は太くなり

高志	多美子	健二	幸一	幸三	孝三	正美	啓泰	多美子	健二	幸一	幸三	孝三	正美	啓泰	高志
陽也	昭七	孝三	健二	正美	陽一	孝二	正美	陽也	昭七	孝三	正美	陽也	昭七	正美	陽也

1

夕焼けの奈落に明星現われる
 夕焼けの奈落に明星現はるる
 校庭をとりまく樹々の片もみじ
 ついでにて鳥居をくぐる宮参
 シュミーズの少女の像や小六月
 「羽衣」や笛の高音に始まれり
 「将門」の見得切る舞台神の留守（日本舞踏）
 神無月なれど月一の神詣で
 「羽衣」や笛の高音に始まれり
 木の実落つトタン屋根から神無月
 火事出して沢庵漬ける樽残る
 模欄の実黄色増すこと香りたつ
 秋澄むや本堂に和す讚仏偈
 秋の陽や蝶軽やかに舞ひ遊ぶ
 ライスセンターへ委託田圃の穧かな
 烏瓜今年はやけに多く生り
 コーヒーに砂糖ひとつを秋灯下
 舞ひ出した雪払ひつつ市に立つ（輪島朝市）
 瓢箪のような男がガムを噛む
 沢庵漬母の味似て買い求む
 これからは落葉燃やしの日々となる
 沼の果て日は燃え尽きて入寂す
 休耕地のソーラー・パネル冬に入る

高志	多美子	健二	正美	陽也	昭七	高志									
健二	多美子	健二	正美	陽也	啓泰	正美	陽也	昭七	正美	陽也	昭七	正美	陽也	昭七	高志

ひもろぎの鳩に餌やる神の留守

線路沿ひ朝日に透けて枯芒

我が庭の花柚子小さく実りけり

マスクして白隱慧鶴の絵図に立つ

弥彦いやひこの刈田に影の稻架木かな

昔のことさと笑ひ捨てたる夜長かな

孝三

高志

陽也

みち

紀子

昭七

一句鑑賞

磯目健一

裏川の鯉の色増す神無月

多美子

釣りが目的で結婚早々手賀沼のほとりに越してきた。片目を失つて釣りは止めたが、今でも淡水魚は大好きだ。少年の頃、釣ってきた獲物は母の手で食卓に出た。恵比須講近い神無月ともなれば、家の裏を流れる野川の水もやや涸れて冷たく澄んでくる。深ん所に身を潜める鯉は、背の色まではつきり見えてくる。この季節、鯉は太つてきている。青黒い真鯉でなく稀にいる緋鯉だったら、冷え込みとともに更に色が冴えよう。釣り達者な老爺に鯉は一日一寸釣ると教わった。尺鯉なら十日通う気構えが要る。それほど鯉釣りは難しかつた。追憶と望郷の念を誘われる季節感豊かな佳句である。

墓ひとつ残して冬田広がれり

紀子

郷里の新潟への旅吟であるとか。どこかで見た光景であった。飛鳥の入鹿の墓、津軽の北畠累代の墓など蕭条とした冬田の中にぽつんと立つ。墓ひとつは一基か墓地一画かという推察が聞かれたが、これは墓一基である。作者もそう言われた。中七の表現がややゆるんでいるという指摘はそうであろう。「唯一基青田の中に墓が立つ」(誓子)という完璧な句があるが、墓ひとつと冬田の広がりは人の歴史への共感を呼び起こす。さじで食う栗の中身は月の色

啓泰

栗の色から月に飛躍した発想力が啓泰さんらしく力強い。匙で掬つて食つたお蔭である。栗名月に響く。神無月喪中の葉書届きけり

正美

喪中の葉書は年賀状の用意を始める前に手元に届くよう11月中か遅くとも12月初旬頃までには届くように出すのがマナーとか。喪中葉書が届くのも季節感が確である。神無月の季語が効いているのだ。

櫻がけ沢庵つけて子沢山

一句鑑賞

光成高志

孝三

兼題は沢庵漬けの積りであつたので、その旨直前に申し上げたので即吟された句でしょう。今は家庭ではもうこういう風景はなくなつてしまつた。昭和の時代の健全な生活の姿であるという声が聞こえたがまさしくそうである。子沢山の唐突感を緩和するには倒置する表現もあるでしよう。

夕焼けの奈落に明星現はる

健二

夕焼けの奈落と断定されたところが危うい表現であるが、夕焼け空の底ともとれるし、太陽の日で真赤に燃えた地獄のような空にともとれるから、新しい解釈ではないかと直覚して取った句。明星は金星の事で、十一月は宵の明星として、南西の低い空に現れる。ほんとはすぐに沈んで見えなくなるのだが、夕焼けの中に金星が現れたという感動が伝わる。手賀沼での囁目吟とは作者の弁。夕焼けの沼面の上に富士山のシルエットとスカイツリーまで見通せる我孫子八景の一つ。こういう句を読むと、「造化にしたがひ、造化にかへれとなり」と朗誦したくなる。

一句鑑賞

武者昭七

これからは落葉燃やしの日々となる

陽也

「落葉燃やし」（落葉焚き）とはなんとも懐かしい言葉だ。ほとんど死語にちかいだろう。公園に散り敷いた落葉もその場で燃やすこともなく清掃車が持ち去ってしまう。冬の風物詩がまた一つ消えた。咏者は散り敷いた落葉を前に困惑と期待を抱いて庭に立っている。

沼の果て日は燃えつきて入寂す

健二

落日に映えていた水のおもてが静かに暮れて一日が終わる。単なる水辺落日の叙景句ではない。「入寂」の

一語によつてそれはたちまち莊厳な曼荼羅図に変容するのである。一語が生きて働くとはこのことだ。

義歯の身に沢庵漬けの恨めしき

〃

一讀共感をさせられる句である。厚切りの沢庵をボリボリ噛んだ若い日々がなつかしい。思い出しては思わず漬物屋の店先にしばしたたずんでしまう。入歎世代の今は昔の夢である。

沢庵漬け母が塩振り僕が踏む

高志

少年の日の思い出の一場面。秋日和の庭先の光景が目にうかぶ。「僕が踏む」とはまさに言い得て妙。咏者も母とともに少年の日に帰つてはいるのだ。あの頃の母も若く美しかつた。

妻の骨埋め秋夜ぐしゃっと酔うのだ

陽一

句末の断定調が重い。咏者は懸命に自分に言い聞かせる。酔う以外に何ができるよう。何が何でも酔うのだ。ぐつしやとなるまで酔うんだ。それ以外ないではないか。上の句の感傷を拒絶したリアリズムも鬼気迫る。深い悲しみが定型の枠を破つてあふれだすのである。定形に收まりきれない激情というものもある。俳句はそれをどうしてくれる。

凧一号吹かかるるものに犬の貌

みち

凧一号の中を飼い主にひかれて散歩に出かけた。ペットだろうか。なにしろ初めての強風なのだ。おまけに

やけに冷たい。ワンチャンにとつてもはじめての経験だ。「世間は甘くない」と悟った顔だろうか。

一句鑑賞

裏川の鯉の色増す神無月

飯田孝三

多美子

裏川だから、家や野山の陰をゆく小流れだろう。鯉の「色増す」が晚秋初冬の気韻をひいたと伝える。「かんなづき」の語の由来には諸説あるようだが、「神無月」が韻象相刺、蕭条の氣を深める。互選披講では鯉の「色」が緋鯉、真鯉と話題になつたが、後者で一同一致した。ままでこの如き仏事も雁の頃

陽一

仏事は葬儀や七七忌、納骨の法要など。とくに法要は、ふつう遺族や限られた親族でしめやかにとり行われる。折しも雁渡る空の寂寥が残された者の悲傷と響き合う。仏事「も」の情懷が句のかなめ。告別から一連の法事の果てに、鴛鴦の過ぎし日々を偲び悲しむである。

凧一合吹かるるものに犬の貌

みち

「凧」は冬の初に吹く強い北風、「一号」はその一番手。眼前、草木の葉が吹かれ散る野面を繰延べ、吹きしぶかる犬の貌をズームアップ。犬は飼犬、連れ立つ散歩の一場面だろう。猫では凧の野面は見えぬ、馬ではすつ飛び、犬はもつとも身近、冬に入る生活の情

景までが見えてくる。

惜命忌雜木は晴れを尽くしけり

幸一

惜命忌は波郷の忌、十一月二十一日。折しも晴れつくす、命終の地、清瀬の雜木の空をふり仰ぎ、いまさら波郷を偲び惜しむのである。澄みきわめる疎林の空は、肅々、「病む生なりき」波郷の一生に通うだろう。つくづく、「けり」の情懷は深い。

沢庵漬け母が塩振り僕が踏む

高志

情景の説明は要らない。ぼくもやつた。昭和は前半に育つた者ことに男子なら、消費地の都会育ちは別、みんな知る小春の我が家の風景だ。「母」と「僕」を並べたのがにくい。つい目頭が熱くなっちゃう。日のこる山並みが見え、せせらぎが聞こえてくる。(22)

一句鑑賞

櫻がけ沢庵つけて子沢山

孝三

「沢庵」の語に既に回顧的な味があり、この句には嘗ての日本の家族の典型的な母親像が凝縮されている。下五に至る快適なリズムによつてこの働き者のお母さんの活躍ぶりが表現されているのである。沢庵はある量を漬けないと味が出ないから、今では

沢庵漬母の味似て買い求む
正美
ということになる。味見してから買ったのである。

「母の味して」ではなく「味似て」と細かいのは「母の味には少し及ばないけれど」との気持ちであろうか。

早贅を刺して翔び去る影を見つ

昭七

近年、鶲の鳥も少なくなり、早贅を見ることが稀になつた。まして蛙、蜥蜴など捕つて枝に刺す瞬間など見ることはまずなかろう。中西悟堂の『野鳥記』でさえ載つていらない。ただ作者の心眼のみが、このすばやい動きを捉えて活写、造形したのである。

休耕地のソーラーパネル冬に入る

高志

少し前までは稻田であつたところが休耕となり太陽発電の板が並んで居る。あれあれ、と思う世の変転、伝来の農と、最新技術のコントラスト。田圃の跡なら広い水平面だから、これを並べるに最適かも知れない。地質の専門家である作者ならではの興味と視点である。

火事出して沢庵漬ける樽残る

みち

火事出して、残つたのは沢庵の樽、などと単純化することで軽い滑稽味さえ感じさせるけれど、背後には一家、一村の浮沈に関する大事がある。深刻な言い方をせず「樽残る」といふ着眼点が俳諧味であろう。火事と沢庵ですぐ連想されるのは斎藤茂吉の「かへりこし家にあかつきのちやぶ台の火燄ほの香する澤庵を食む」である。留学から帰朝する直前の火事で彼の病院

も独逸から送り溜めた書籍も全て鳥有に帰したという。掲句はこの歌をつづめて言つているようでもある。

裏川の鯉の色増す神無月

多美子

川の鯉だから普通の真鯉かと思うけれど、色鮮やかに見えるのは、川水が澄んだからか、鯉も夏の疲れが失せて元気になったのか、在りうることである。秋深まつた川に鯉の色の変化を見た感性はさすが。

墓ひとつ残して冬田広がれり

紀子

新幹線の途中でよく見たような記憶は僕だけではなかったらしい。広い田の面に残る墓が目立つ蕭条たる空間。屡々、その墓の銘は「陸軍何等兵誰々」であったりして、地域の歴史も感じさせるようである。

沼の果て日は燃えつきて入寂す

健二

手賀沼の夕景と言う。まことに沼の彼方、夕富士の辺りに見える、高僧の死に言う「入寂」の語にふさわしい輝きをもつて冬の太陽が沈む莊嚴の光景。

福助の慇懃の頭の夜長かな

幸一

福助という日本のポップアート、昔から羽織袴の同じ姿で座つてゐる縁起人形、と夜長との取り合せが何とも面白い。大頭を傾げて変わらぬ曖昧な微笑を浮かべながら手を付き畏まつてゐる彼は、夜の座敷に人間の何を見てゐるのであろうか。

お便り広場（到着順、敬称略）

周年記念号の基金にしますので、先の本の裏表紙にある口座へ
どんと振り込んでおいてください。)

結構な品物を賜りました。ありがとうございます。

（中略）今年中お二人で我孫子までお出で頂ければお
昼でも御一緒しませんか。とにかくくれぐれも御身体
を御大切にしてください。
(10/27 小山陽也)

「オリーブの果汁で乾杯共白髪」とんだお気を遣わ
せてしました。恐縮です。何よりの物を有難うござ
いました。「はしけやしあな満々とオリーブの精」
老々、しみじみいのち潤させて頂きます。先年の小豆
島駆け足旅行のあちこちを思い出します。「オリーブ採
る瞳きらきら岬の子」冬に入ります。御身ともぐお大
事にご健吟の裡を祈り上げます。お礼まで。
(10.28 孝三) お疲れが出たのですね。びっくりしました。狭心症
とのこと先日のお電話にて伺いました。ハードスケジ
ュールの日々を送つてこちらのではと拝察致してお
りました。ここらあたりで小休止なさつて下さい。過
日日展鑑賞は奥様ご同伴でいらつしやつた旨、ご心配
でおられたのですね。とにかくゆっくりゆっくり大き
な空を見上げ深呼吸をしてみて下さい。そして身体の
中に溜つた余分な物を吐き出してみて下さい。お茶を
一服どうぞ召し上がつて下さい。呉々もお大切に。

光成高志様 奥様
(11.1 加納綾女)
調子は如何ですか？手賀沼エコマラソンの完走Tシ
ヤツを送ります。何十年ぶりの参加でしたが、人數
も増えて人気大会になつていました。Tシャツぜひ受
け取つて下さい。また連絡します。
(11.2 拓也)

思い乍拝見しております。私は体調も良く秋の取入れ
自分一人ですませました。元気で仕事できることに感
謝の毎日です。今日は玉ねぎ植え付け準備穴あきマル
チを敷いて準備しました。元気でいますのでご安心下
さい。敏子さんしつかりブレークをかけてください。
妻偲び十三回忌終えにけり
(*皆さまから一部千円頂いています。よろしかつたら、次の10



振動の勉強は中止西洋美術史は十一月十三日以降は来年夏頃迄お休みです。光成さんもあまりムリをなさらないで下さい。十三日を楽しみにしています。

(山陽也)

十月二十五日付のお便りと美しい野鳥のエハガキ沢山頂きながらごぶさた申し訳なく御礼と共にお詫び申し上げます。ヨタク毎日のことをしている中に夕暮れが早く一日予定のことを出来ず、後悔の中に日を送っております。エハガキは、オジロノビタキが特に気に入っておりまます。小鳥来る、色鳥と云つても実際にはまだあまり来ていません。四十雀と山ガラが今ポツく来始めました。冬になりました。お大切におすこし下さいませ。光みち様

(11月8日 長屋璃子)

立冬を迎えることしもここまで来たかと云う思いでおります。ご病状いかがでいらっしゃいますか。白金葭の編集などご負担になることを恐れております。私は達者ながら一人で生きて行くにはあまりに沢山のことが肩にのしかかり、優先順位をつけて片付けるべく四苦八苦しております。急な気温の差にお気をつけて下さいませ。光成高志様 (11月8日 長屋璃子)

高志様 大変失礼してしまいました。封書を頂きました頃から今日まで福山の母のところへ行つたり來たり、島根の夫の親族高齢の人々が次々と変化を來たし

多忙を極めました。貴方の作品は落ち着いてゆつくり読ませて頂かねばと机の上に置いたままに楽しみにしておりました。昨日やつと読ませて頂きびっくりしてしまいました。(中略) ゆつくりしつかり養生して下さいね残る人生は楽しいものにしましようね (11月7日 勝子) (中略のところ、適切なアドバイスありがとうございます。10月に書きまして) 10月に書きましたように何事も腹八分目の養生訓を守つて生活しております。貴女の言う通りオリーブ油を使っています。若い医者からは何をしてもOKと言われていますが、人に頼ることなく、自分なりの俳句生活を送っています。貴女は俳句はやめたの? (高志) 十三日はまたことにありがとうございました。非常に雰囲気の良いしかもおいしい料理で上々でした。そして帰途公園から楚人冠の書斎まで、その上結構なお土産まで頂き非常に恐縮しております。光成さんも昔と変わらぬお姿を拝見してすっかり安心しました。ぐも御身体を御大切にして下さい。来年暖かくなりましたら梅の花で如何でしようか? この手紙書き上げて行方不明二度目です。ボケですね。駄句五句送ります。

(一) 駄句ばかりです。 (11月14日 小山陽也)

千葉の会 150回記念吟行会ということで 18・19日と泊りがけで近江八幡へ行つてきます。短冊を同封しました。どうぞ皆さまへよろしくお伝え下さい。

(11月14日 幸一)

おかげんいかがでいらっしゃいますか。白金葭の発行にご無理をなさつていらっしやること、心配しております。句会では十一月に「狸」が兼題ででましたが、実物ならずとも皆々何とか詠むものと感心しました。寒さもそれらしくなつて来ました。みち様共々十二分の健康管理をなさしますようお願ひ申し上げます。

光成様 みち様

(15) 長屋璃子

きのうは大変お世話になりました。コビアンでの話などで疲れたのではないでしようか。心配です。小生の到着が遅かつたためみちさんには蕎麦屋に見届けに行って下さつたのに気づかず済みませんでした。恥じ入ります。これからもアピス夕に直行するつもりです。悦子さん追悼文別紙よろしくお願ひします。一句鑑賞本文は来週に入つてからFAXします。(11.19 孝三)

喪中の欠礼のごあいさつ謹んで拝読いたしました。ここに故お兄様方のご冥福をお祈り申し上げますと共にご家族ご一同様のご健勝を祈念いたします。

(二〇一六年十一月二十一日 長屋璃子)

受贈誌 (H 28年11月号)

野仏のみんな豊頬草の花

(彩131号)

平野ひろし

草紅葉湯守に薬師観世音 (リ)

(リ)

〃

草茂る円墳そげ髪となり (リ) 小泉博
野を歩み畔を歩みて賜日和 (あすか11月号) 野木桃花

黒塙の内に葭簀を小商ひ (リ) 山尾かづひろ
紅葉の一葉を連れて戻りきし (東京ク11月) 輝子

傘ひろげ受ける見沼野零余子採り (リ) 理佳江

裏山の首なし羅漢神無月 (リ) 守啓

石蕗や無住寺となりし寄せ仏 (リ) 万世遊

青年の見つむ海原神の旅 (リ) 武子

立冬や常のごとくに夕厨 (リ) 璃子

こだま

句集燐々(19) (彩131号)

小泉 博

『白金葭』合同句集一俳句とエッセイの紹介と共に鳴句。
かまつかや出会い頭の「いやんばい」 飯田孝三

悪靈ならず昼眠る五位鷲は 増田陽一

増田陽一

石たたき新調の靴覗きに来

増田悦子

春光や白金葭の白高穂

光成高志

鮖桶を軒端に干して秋日和

吉羽多美子

受験子に生みたて卯届きけり

倉田紀子

女声の身に印旛の大根干し

浅野正美

初曆まづ診察日書き入れる

松村幸一

生きること飽きても八月十五日

武者昭七

春の水芹を育てて澄みにけり

七草粥蓬齋は庭の草

山尾かづひろ吟行ノート H 28.11.06

外出の肩のほらそこ木の葉髪

袴すっぽりぬけし団栗侏儒のこゑ

床這ひし祖母の晩年木の葉髪

掘られゆく蒟蒻芋と土塊と

雑巾にまとわりつける木の葉髪

蒟蒻選り腰掛腰に括りつけ

運座初会の記

青木啓泰
小山陽也

飯田孝三

光 みち

磯目健一

光成高志

〃

小説家漱石は俳人としても有名だ。子規との邂逅が契機になって俳句に熱を入れ、松山、熊本時代も積極的に運座（句会）に参加し自分でも主宰している。英本国に留学したときも留学生仲間と何回も運座を開いている。「手向くべき線香もなくて暮の秋」は、ロンドンで子規の訃を聞いて詠んだ五句中の一句である。私の所蔵する全集第二十三巻は英詩・漢詩文・和歌・新体詩も收めるが、大部分は俳句によつて占められている。俳句に次いで多いのは漢詩文だが、和歌は十首に満たない。巻末の作句の季題別索引は、それだけで一冊の「季寄せ」になる内容と分量をもつてゐる。俳句への漱石の並々でない傾倒ぶりが窺える。子規や虚子の著

作や評伝を読むと、中心的な活動として運座が大きな意味を担つていたことが分かる。俳人仲間との共同作業のなかによく個性を伸長させる運座という、日本独自の文学サークル活動が遠く中世の連歌に遡り、近世以降津々浦々まで拡がり、現代に至つてることは、驚くべきことである。

私はこれまで作句に手を出さなかつたが、俳句そのものには魅力を覚え関心も抱いて自分なりの鑑賞をしてきた。現代詩は複雑難解で手こずつたが、短詩形の有季定型詩である俳句は自然に訴えてくるものがあり、その豊かな情趣は親しみ易かつた。俳句への関心は、年齢を重ねるとともに深まつてゐた。これまで余技として同人誌に拙い小説を発表してきたが、頽齡になるに及んで筆が鈍り、遠出が億劫になつてきた。そんな訳で好きな俳句に集中して楽しめる結社を地元で見つけたいと思つてゐたのであつた。オープニアカデミーの源氏物語講義で席を並べた光成高志氏とまたま雑談して、氏が白金霞という俳句結社を主宰する俳人であること、しかも毎月私の住む我孫子の図書館で句会を催していることを知つた。次の講義の日、氏は月刊の句誌と浩瀚な合同句文集を進呈してくれたばかりが、主宰する句会つまり運座に誘つてくれた。偉ぶつた印象の全くしない人の良さそうな髭もじやの氏の好意に

私は大いに感謝した。もらった句誌と合同句文集を帰宅後に読んで、そこに横溢する和気藹々たる連衆の絆と高みを目指す文雅の精神とを発見して「之なる哉」と叫びたい気持ちだった。言うまでも無く人間の邂逅には運が付きものだ。共にいそしむ連衆としてこの上無い集まりに参加できる幸運に恵まれたことを私は悟った。かくして平成二十八年十月二十一日正午、私にとり記念すべき「白金葭」運座初会の日を迎えて、我孫子の自宅より白山台地の崖下道を手賀沼池畔の図書館へ自転車を走らせた。

和辻哲郎は日本の古典的文芸を論じて、集団的創作である連歌が芸術へ昇華するためには、個と全との弁証法的統一が肝要の急所だったという。いかにも哲学者らしい難しい表現だが、具体的には連歌の付け句の仕方から人ととの共同態のあり様を見ている。句を付ける人は前句の味を徹底的に味わう。その味に没入して己れを忘れるとき、付けるべき句が忽然として浮かび上がってくる。付ける人と付けられる人との間の気が合うところに自他不二の法悦のほか、個人的創作では不可能な予期しない芸術的な達成が実現するといふのだ。その共同は人々の同一化でなく、人々があくまで個であることを通じて「人々個々円成」の上にのみ芸術としての連歌は生まれる。個々円成せる人が一

座の共同参加で創作すること。その創作の一一座は同時に鑑賞の座である。だから創作は鑑賞であり、鑑賞は創作である。そのような連歌から出発して自覚的に一つの文藝様式に仕上げたものが芭蕉の俳諧だと和辻はいう。この創作者同士（連衆）の共働を可能にする場としての運座の精神は今日の運座にも変わらず流れている。白金葭の運座に出席してまず感じたことが、まさにこの和辻のいう個々円成せる人の一座ということだつた。のびのびと自由平等に高み深みを目指す雰囲気は快く、ひとりで鑑賞のみしていたときは全く違う作句の喜びも、感じることができた。

傘寿を過ぎてオール入れ歯になつてからは、發音が不明瞭で自然と口籠もることが多くなつた。そのため運座の自己紹介をかねた私の挨拶は甚だ要領を欠き、願いが叶つた嬉しさを十分に伝えられなかつた。次回の運座では、私なりの創作と鑑賞を精一杯披露したいと思つています。

(H 28・10・30)

増田悦子さん追悼句と追悼文

光成高志

蓮見舟少し沈ます人恋し
いかならん山湖に会ひし夏の蝶
青山よ駒して呉れエツコサーン

松村幸一

枯蓮を抜けて並びぬ番ひ鳥
天界の蓮の舟路で逢ふつもり
手賀沼の釣瓶落しは胸を染め

飯田孝三

あぢさゐの藍のきはみに逝きませる

玉葱の箒に主あるじ待つ水中眼鏡
波はひき返すプールの向ふから

吉羽多美子

慰めて慰められて鱒雲
露の世や何故先に逝き給ふ

倉田紀子

あめつちに一途の道瓢の笛
薰風やまなかひに見る青い蝶
芒原光の中に逝き給ふ

浅野正美

遠き日の思い出新た走馬燈
数々の思い出照らすスープームーン

光 みち

紫陽花の箱根懷かし山湖会

梅雨最中口紅差して逝かれけり
お惚けの悦子さん好きプールと鯛

増田陽一

夏薊の見てゐる野辺の送りかな
蝉好きの蝉鳴くまでを存えず
骨壺にこぼろぎの問続くなり

悦子さん追悼文

光成高志

日ごとなる朝のトースト鳥雲に
髪染めてをり水仙に見られをり
時の日のこつこつと割る茹で卵
席ゆづる子にありがとう青葉風(以上霞の会)

待春の畳こけしの影伸びて

嘉久さん冬の土筆が出てゐます

巻寿司を買う終の咲くところ
地震のたび潜る机やヒヤシンス
カステラの切り口乾く春の昼
紫蘇摘みて戦後小学五年なり
鉢叩茄子のヘタにて育ちけり
月赤し晩の御飯はギョーザかな
石たたき新調の靴覗きに來
葱買ひて優先席も空いてをり
八階まで門松なけれ初筑波
建国記念日遠富士をテラスより
蜥蜴出て挨拶の如ふり向けり

牡丹の芽金魚のやうなヘリコプター
カーテンに透けて大きな春の月
夜が明けて上手に刻む春キヤベツ
母と見し吉野の里の螢かな
玉葱を剥くに水中めがねかな
一口でよき生ビール鳩とべる
体育の日の杖つきて躊けり
初時雨大根の葉に蕪の葉に
妹と揃ひの赤きちやんちやんこ
極月の背中を搔いてくれないか
菱喰の啼く江戸崎を思ひをり
鬼やらひ高階に声ひそかなる
すすめ鳴く我にもありし受験の日
菜を洗ふ厨の水も春の水
柏餅葉の乾きゆく早さかな
鯛などと泳いでみたきブールかな
朝のブール私の波が向うまで
私乗れば少し沈むか蓮見舟

('13・12・20まで)

は制限があり、自由選句できない。全部並べて読むと悦子さんの個性がだんだんわかつて来る。陽一さんはそういう悦子さんを愛しておられたに違いない。男が女を愛するのは身体だけではない。彼女のとなりを好きになるのだ。若い時は精力もあり、どこでもよく眠つたりすると、見えるものが限られるのだろう。心の自由がどんなに大切かわかる。悦子さんのおとぼけ俳句から滲みでるユーモアが私は好きだった。「私乗れば少し沈むか蓮見舟」は悦子さんの個性を表している。私は誰にもハンデキヤップを付けて句会進行をしてはならないという思いで、隣の席の悦子さんでも、「悦子さん！」と呼び掛けていた。元気な頃は「はーい」と声が聞こえたが、これも聞けなくなつて、今に至るのは残念である。陽一さんから戴いた蝶採集旅行記に必ず悦子さんの姿があつて、道東カーリ行では、ここから引き返そうと悦子さんが云われ、渋々陽一さんが引き返す道もあつて、わが身の来し方を思つて羨ましく思つたことでした。

吉羽多美子

二人には大きすぎたる葱の束
胡麻せんべいぱりつと割れて秋の風
湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ
悦子さんは思うまま句を詠んでその句にユーモアが
滲む。そこがみちさんと同じ。理屈抜きの句。句会で

かにお眠り下さい。

浅野正美

陽一さんはこれからもお付合いしていきます。悦子さん安らかなお眠り祈っております。

飯田孝三

悦子さんと句会で一緒に一緒できたのは8カ月程でしたが、ご自身の思つてゐる事を率直に表現するチャーミングな方という印象が残つております。悦子さんの作句の中で「柏餅葉の乾きゆく早さかな」が私は好きです。わずかな変化に心を止め時間の広がりを感じました。もつとご一緒に一緒したかったです。ご冥福をお祈り申し上げます。

光 みち

顧みるに悦子さんとは十年以上のお付合いでした。

湖畔吟の手賀沼吟行句会に続き、布佐の葭の会で親しくなり、ご自宅のマンションに招かれて悦子さん手作りのビーフシイチューまでご馳走になりました。ビーフシチュードがこんなにおいしいものかと感激しました。そのお返しもしないうちに逝かれてしましました。平成二十年には飯田孝三さんのお世話で箱根吟行でも一緒にでした。いつも陽一さんのそばを離れずお気遣いされる優しく控え目な悦子さん、しかも、おしゃれでセンスよく、綺麗な方でした。俳句の方は独特な感性の持ち主で、人真似できないものを持っておられました。陽一さん悦子さんご夫妻に出会つてから、いつもあるようになりたいと私たちの目標にしておりました。

陽一・悦子さんのお住いは流山市、筑波、富士を望むマンションの八階(悦子さんの句が教える)。愚妻はたまたま水泳教室の仲間に、長年、同棟の下階に住む婦人がいて、日頃のご夫妻や悦子さんことを伺つてい

陽一・悦子さんご夫妻とは、「白金霞」の刊行以前に、高志さんに誘われ、何度か手賀沼蓮見舟吟行でお会いした。ご紹介されたのは舟着き場に近い岸辺のベンチ。お二人の穏やかな笑顔に迎えられたのが、昨日のことのように思える。ときには小生が先着したこともあったが、たいていはご夫妻が、湖面を望むベンチで皆を迎えた。ちょうど八年前の五月末、ご夫妻と高志・敏子さんご夫妻、久保内美清流さんと一泊の箱根吟行をした。箱根路はつづじが散つたばかりで、紫陽花の盛りには間があつたが、登山電車で交わした悦子さんとの会話が懐かしい。かねて、また一度と思いながら果たせなかつたのが悔やまる。美清流兄もすでに亡い。悦子さんの句はありのままを詠んで深い。拵えがないのだ、だから、読み返す度にしみじみ心にしみる、そして、ほんのりユウモアをまとう。もう、そんな悦子さんの句にお目にかかるれない。

陽一・悦子さんのお住いは流山市、筑波、富士を望むマンションの八階(悦子さんの句が教える)。愚妻はたまたま水泳教室の仲間に、長年、同棟の下階に住む婦人がいて、日頃のご夫妻や悦子さんことを伺つてい

た。「お二人ともあんな穏やかでやさしい夫妻はほかに知らない。奥さんは病院の薬剤師としてぱりぱり仕事をされ、ふだん、うちの子なんか随分かわいがつていてだいたいわ、このプールだつて奥さんに勧められたのです」四年前の十月の例会だったろうか、銀座吟行の紹介にほつと笑まれた、悦子さんの生き生きとしたお顔が忘れない。「銀巴里の階段ふかき巴里祭」「少女には苦きビールや巴里祭」や「青葉透く学生街のビヤホール」は、颯々、悦子さんの青春像を髪飾させるではないか。水泳教室のコースがいつもいき違つていた妻は、「ご計報に『一度、お会いしてお話したかった』といい、絶句した。折節詣んじたりする、御句から二十句を記し悦子さんを偲ぼう。

松葉牡丹スタンプを押すごとく
石たたき新調の靴覗きに来
猫が道よぎる建国記念の日
牡丹の芽金魚のやうなヘリコプター

祭笛鯉口あけて浮かびけり
玉葱を剥くに水中眼鏡かな
青葉透く学生街のビヤホール
「銀巴里」の階段ふかき巴里祭
少女には苦きビールや巴里祭
鈴虫にとつて置くなり茄子のへた

初時雨大根の葉に蕪の葉に
極月のごとごと仕舞ふ靴の箱

極月の背中を搔いてくれないか
教会のマリア見にゆくちやんちやんこ
菜を洗ふ厨の水も春の水
ごろごろとたてよこにあり甜瓜

朝のプール私の波が向ふまで
心臓ほどの蓮の蕾や終戦日
台風に洗はれて月大きかり
湯たんぽの冷めて盛んな朝雀

（『白金霞』月次掲載順）
悦子さん安らかにお眠りください。
合掌

諸家より亡妻への悼句を賜り忝く存じます。またとなき句友の方々のご配慮、ご同情に私は感涙して居ります。誠に有難うございました。（11.22 陽二）

我孫子日記

10/21	例会
10/26	SOA
10/28	日展
10/30	印西文化ホール
11/2	SOA
11/3	* 平成館
*2	11/7 将門神社
*3	11/8 外来診察
11/9	SOA
11/13	我孫子
11/16	SOA
11/18	例会

* 口は喝怒目の達磨冬に入る

平成館に禪を見にゆく神無月

立止る赤衣の達磨図文化の日

禪の中に一節切見る文化の日

*2 将門神社リホームされて冬來たる

*3 遊休地のソーラーパネル冬に入る

*4 小春日や陽也さんはよくしゃべる

団栗の艶々一つ直哉邸

未だ枯れぬ蠟螂ゐるブックラック

編集後記

悦子さん追悼号をと思いながら私の急病の所為で今月になりました。悦子さんをお知りの方々から追悼句追悼文を寄せて頂き編集子として感謝の意を表します。

昨日も五年前の大地震の余震があり、津波も来て東日本の皆々大急ぎで避難したとか、私はベッドで揺れ

を感じていました。本誌はある地震直後に創刊したものです。これだけ日が経つてようやく本誌がかたまつて來ました。
 • 各人独立した俳人の集りで各々の流儀で各々の信念でもつて作句されたものが投句される。そのまま編集するのが私の役目。
 • 読者からの便りは全部掲載してそれぞれの生活感季感を共有する。これは思ったより大切な文芸だと思う。

・俳誌交換は、平野ひろし主宰の「彩」、山尾かづひろさんの「あすか」同吟行ノート、長屋璃子さんの「東京クラブ」の三誌である。これでも十分俳壇の様子がわかるのでもう右顧左眄しない。

・エツセイは私の芭蕉の軽み以後と武者昭七さんの宮沢賢治が当分つづく。これは是非目を通していただきご意見など聞かせて下さい。

以上で後記としました。なにか書き忘れたことがありますように思われますが、とにかく次の十周年を目指して進みます。東京五輪の翌年になります。

白金霞 11月号（第69号）平成28年11月発行
編集・发行人 光成高志（〇四一七一八七一〇六八）
発行所 270
表紙の題字 270
.. 加納綾女。我孫子市南新木2
写真 119
.. 11月22日の白金霞
11月 22
14 17

